

「戀」する潘岳

——漢魏西晋詩歌に見える「戀」字と潘岳「悼亡詩」について

狩野雄

はじめに——手に負えない恋

恋とはいったいかなるものだろうか。いっとうやっつて生まれるのだろうか。誰しもが心のなかに持っているよく知っているはずの感情であるが、改めて問われてみれば、誰にもしかとはわからない。それは、どこかわたしは何者かと問うのにも似ていて、誰もが直観的にその答えを知っているようではないながら、その実いくら問うてもついに確答を得ることが叶わない類の問いなのである。

誕生においてすでにそうであるように、個別的具体的事例においても、しばしば恋は答えを用意しない。そして、おそらくはこのためであるう、恋には、あたかも目的地が示されないまま踏み押されてゆく足跡のようなところがある。つまり、恋には現象の

みがあるのであり、恋の本質というものは筆者の手に負える考察対象ではないようである。

ただ、筆者にも恋の様相の追憶的記述や「戀」字の誕生と行く方についてならば、若干の考察が可能であろうし、そうした営みの足跡の集合を眺め直してみることで、深遠なる恋の一端がおそらくに浮かび上がることがあるかも知れない。

本稿においては、まず、比較的成立の新しいと考えられる「戀」字が、成立時期に近い漢魏西晋期の詩歌作品において、いかなる字義の変遷・拡大の路を辿ったのかについて考察を進め、ついで、その包含する意味を、字義の一転折点となると思われる西晋期の特に潘岳の「悼亡詩」中に見える句いの表現との関わりにおいて考えてみることにしたい。本稿を「戀」する潘岳」と題する所以である。

一 遅れてきた「戀」字

それではまず、現在にあつて恋といういささか厄介な感情を写し取るのに用いられることの多い「戀」字がどのようにして成立したのかについて、諸の字書・辞典の記述を確認することから始めてみることにしよう。

漢和辞典や漢語詞典を紐解いてみると、「戀」字がそれほど古いものではないらしいことが知られる。『大漢和辞典』と『漢語大詞

典』に載せられている用例を眺めてみても、「蘇武」の「詩」が最も早く、それに次ぐのが王粲の「從軍詩」であり、漢代から先に遡るものは挙げられていない。加えて、「蘇武」の「詩」はもう少し後の世の作だとも考えられているし、王粲の「從軍詩」については「戀」字それ自体に関して異同を含んでいる。辞典の用例の次元において既に種々審らかならざるところのある「戀」字であるが、実際、十三経や先秦諸子などに用例を求めてみても見出されず、このことと平仄を合わせるように、『爾雅』『説文解字』『釋名』『方言』といった後漢までの字書類にも収められていない。「戀」字の用例として、管見の限りで最も早いのは——ここにはまた考えなければならぬ問題があるように思われるが——、『史記』范雎蔡澤列傳に見える「戀」字を重ねた「戀戀³」というものであり、現存する字書の用例で最も古いのは、梁の顧野王の編に成る『玉篇』のそれであるようである。『玉篇』の「戀」字を掲げてみよう。

戀、力絹の切。慕なり。(戀、力絹切。慕也)〔玉篇 心部〕

同じく心部に属する「慕」でもって解かれており、この「慕」を「したう」と訓めば、今日のわれわれにも理解しやすいものとなる。『玉篇』に先行するものとしては、「戀」の字義について解くものではないが、「戀」と「慕」を類義の語のように捉える例が

後漢に見られる。

思舊故以想像兮 舊故を思うて以て想像し

長太息而掩涕 長く太息して涕を掩う

〔王逸注〕朋友を戀慕し、兄弟を念うなり。……(戀慕朋友、

念兄弟也。……)〔楚辭補註 遠遊章句第五〕

『楚辭』遠遊篇に見える「舊故を思う」という表現を、王逸が「朋友を戀慕し、兄弟を念うなり」と注解している。これは、「戀」と「慕」とが共有する字義に基づいて、連文的に用いたものと考えられ、『玉篇』が「戀」を「慕なり」と解くゆえんの一つとなっているかも知れないものである。

儒家經典や先秦諸子に用例がなく、『史記』に「戀戀」の一例(『漢書』に二例)を認めるものの、後漢までの字書は収めない、という「戀」字をめぐる状況は、「戀」字が漢代になってから成立したという推測に向かわせるものである。このことは、次章で考察を試みる詩歌作品における「戀」字の用例に関しても同様のことを指摘し得る⁴。やはり、「戀」は少し遅れてきた字であるようだ。ところで、「戀」字はどのような要請のもとでどうやって生まれてきたのだろうか。

「戀」字に関わって、しばしば取り上げられるのが、「戀」の「心」を「手」に換えた「攣」字である。ともに「戀」を声符に持つこ

とから通ずると解されるが、このあと見るように、『周易』に用例があり、成立は「攣」字の方が格段に早い。「攣」字は『説文解字』や『釋名』にも見えており、『説文』に「係なり」とあるのによれば、手でもってつなぐのを本義とする字である。

攣、係なり。手に从う、辵聲。（攣、係也。从手、辵聲）

〔説文解字注 十二篇上〕

手でつなぐのを本義とすると考えられる「攣」字であるが、『周易』小畜に見える「攣」について、『經典釈文』が「子夏傳」が「戀」に作って「思」であると解していると指摘する。

九五 孚有攣如たり、富其の鄰と以にす。（九五 有孚攣如、富以其鄰）〔周易 小畜〕

攣 力專の反。馬云う、連なり、と。徐又力轉の反。子夏傳戀に作り、思なりと云う。（攣 力專反。馬云、連也。徐又力轉反。子夏傳作戀、云思也）〔經典釋文 周易音義 小畜〕

この「子夏傳」も『漢書』藝文志に記載がなく、卜子夏に仮託した後世の書である可能性が指摘されており、そもそも用例としてそれほど遡るものではなさそうであるが、『經典釋文』のこの記述によって「戀」字は「攣」字と結びつきつつ、「思」という意味

が見出されることになる。このことは『楚辭』の遠遊篇に見られた「思」を「戀慕」「念」と読み換えるのと通ずるものであろう。

一つの可能性として、「手」でつながる、手でひっかける「意の「攣」字を元につくられたのだとすれば、「戀」字は「手」を「心」に換えることによって、「心」につながる、引かかる「状態を意味するもの」として生み出された、言い換えれば、それまでは「攣」字を用いて手で繋がるように心に引っかけかかっていると表現されていた思いを直接心にひっかかると表現すべく心部に属する「戀」字が誕生した、と考えられるのである。「戀」とは、心のなかで引っかけかか（思われて）仕方がない状態を表す字ということになる。このほか「戀」字は、成り立ちにおいて、思・慕・念・眷・情等の字と深い関わりを有しているように考えられる。

続いて、本章において考察を試みた「戀」字誕生に近い時期である、漢魏西晋期の詩歌作品に見られる「戀」字の用例を、必要に応じて辞賦作品にも触れつつ、検討してみることとしよう。

二 漢魏西晋期の詩歌作品に見える「戀」字

生きた時代と王朝名とが厳密には符合しないことも間々あるが、いま便宜的に遼欽立輯校の『先秦漢魏晉南北朝詩』の区分を主たる基準として考察を進めることとしたい。

(1) 漢詩の「戀」——恋しやふるさと

漢代の詩篇に見える「戀」字の扱いは、蘇武詩しかり李陵詩しかり、作者に関して異説が指摘されることがしばしばあるので難しい面を有する。例えば、『文選』に収められ、蘇武の名が冠せられる詩や『藝文類聚』所収の李陵「贈蘇武別詩」には次のように「戀」字が見出されるが、遼欽立氏はこれらをいずれも「後漢末の李陵」のものであると考察・分類されている。ここでは一応、遼氏の分類に従って後漢の作品としておくこととする。

征夫懷遠路 征夫は遠路を懐い

遊子戀故郷 遊子は故郷を戀う

〔文選卷二十九 蘇子卿詩四首〕其四〕

戎馬悲邊鳴 戎馬は邊鳴を悲しみ

遊子戀故廬 遊子は故廬を戀う

〔古文苑卷四 李陵贈蘇武別〕詩〕

この二例の「戀」字が表すのは、いずれも「遊子」、旅の空にある人間の郷愁である。この旅愁の感情としての「戀」は、後漢無名氏の楽府「長歌行」古辞（樂府詩集卷三十）にも「遠望は心をして思わしめ、遊子は生む／生くる所を戀う（遠望使心思、遊子戀所生）」と見えており、遠く望んでも視線で捉えられないことと対

を成すものであると理解される。すなわち、今に伝存する漢代の詩篇の「戀」字について敢えて一言で表すなら、わが国の唱歌「旅愁」のなかの一句「恋しやふるさと」を以て当てられるのである。これは、寄る辺なき者の、望んでも視界に捉えることは叶わないが確かに存在する、馴染み深いものへの切なる想いと言いつ換えることもできよう。「李陵録別詩二十一首」の一首であるとされるものに、「依依として明世を戀い、愴愴として久しく懐い難し（依依戀明世、愴愴難久懷）」と詠じられている、「明世」を「戀」うる感情も、この延長線上にあるものであろう。こうした故郷に対する「戀」の感情は、『説文解字』の「慕」字の説解からも窺うことができる。

慕、習なり。心に従う、莫聲。（慕、習也。从心、莫聲）

〔段注〕其の事を習う者、必ず中心に之を好む。（習其事者、必中心好之）

〔説文解字注 十篇下〕

段玉裁の注に「其の事を習う者、必ず中心に之を好む」とあるように、人の心には慣れて馴染みのあるものを好ましいと思う傾きがあるが、なかでも生まれ故郷を想う気持ちはまた格別なものである。この好ましい場所から引き離されているのが遊子であり、その心には往々にして愁いが生ずる。漢代の詩歌に見える「戀」はまさにこのことを写し取らんとしているのである。

ところで、ここまでの検討において、「戀」字のなかに異性への恋情は見出されていない。もちろんこのことはそうした感情自体が成り立っていないということを意味するのではなく、「戀」字が担うに至ってはいないというに過ぎない。更に、亡佚した詩篇のなかにそうしたものがあつた可能性が否定できないばかりか、ことが感情の表現に関わることであるので、筆者の錯誤も十分に考えられる。丁福保『全漢三國晉南北朝詩』が「漢詩」に収めていることもあり、例えば、「漢詩」の用例として、次のものが相当すると考えられることがあるかも知れない。

既含睇 又宜笑 既に睇を含み 又宜く笑う

子戀慕予善窈窕 子予の善く窈窕たるを戀慕す

〔宋書樂志三〕 相和 〔今有人・陌上桑・楚詞鈔〕

『宋書』樂志が「楚詞鈔」としているように、この歌辞は『楚辭』九歌の「山鬼」に基づいたものである。比較のために「山鬼」の該当箇所も掲げてみよう。

既含睇兮又宜笑 既に睇を含み又宜く笑う

子慕予兮善窈窕 子予の善く窈窕たるを慕う

〔楚辭〕 九歌第二「山鬼」

すでに述べたように、『楚辭』遠遊篇の「舊故を思う」に施された王逸注に「戀慕」の語が見えていた。ここでも同様に「戀」が「慕」に近い感情を表すものとして用いられており、加えて、「山鬼」を対象とするものではあるが、異性的存在を慕う感情の表現に「戀」字が用いられているのである。丁氏に従えば、この「楚詞鈔」は漢代の「戀」字を用いた恋情の表出であることになる。ただ、かかる異性的存在を対象とする際に、王逸注が「戀」字を使用していないことは少し注意されてよいだろう。

「楚詞鈔」は、本歌である『楚辭』九歌「山鬼」の「兮」字を消去して三・三・七言句に整える際に「戀」字を附加しているわけであるが、この歌辞は、『宋書』樂志に収められ、魏の明帝期以降に改編がなされたと考えられる一のもの一つである。また、『樂府詩集』卷二十八 相和歌辞三もこの歌辞を収めて「晉樂所奏」と注記している。すなわち、この「楚詞鈔」の「陌上桑」は魏明帝期以降の宮廷において演奏された歌辞であると考えられるものなのである。そして、改編者が宮廷で演奏するのに相応しいものとするべく、「兮」字を処理し、その際「慕」に添えられたのが「戀」の字なのである。更に、いま述べたように、王逸はこの箇所注をして「戀」字を用いてはいない。こうしたことを踏まえると、『楚辭』「山鬼」から「楚詞鈔」「陌上桑」への歌辞の改変には、むしろ、漢代の詩篇に用いられた「戀」字が特定の異性への恋情を担うには至っていない状況が映し出されていると考えるべきな

のではなかるうか。

漢代の詩歌作品に見える「戀」は多く故郷へ向けられる思いを表出したものであったと考えておくこととしたい。王逸の注において既になされていることではあるが、詩歌作品における「戀」字は、次の三国期に至って明確に人へと向けて用いられるようになるのである。

(2) 三国詩の「戀」——なつかし父母

前節で見たように、漢代の詩歌における「戀」字は、遠く離れて見ることでできない故郷への想い、郷愁を表すものとして用いられるようになったのであった。このことは、右に掲げた楽府「長歌行」古辞と句を共有する曹丕の「明津に於いて作る」詩¹²の存在が端的に示すように、いわゆる三国期の詩篇においても同様に認めることができる。曹丕の手に成る詩歌作品には他にも「燕歌行」二首の其一に「戀」字が用いられている。

慊慊思歸戀故郷
君何淹留寄它方
賤妾榮榮守空房
憂來思君不敢忘

慊慊として歸るを思い故郷を戀いん
君何ぞ淹留して它方に寄る
賤妾榮榮として空房を守り
憂い來りて君を思いて敢えて忘れず
〔宋書樂志三 曹丕「燕歌行二首」其一〕

この「燕歌行」にも遊子が「故郷」を「戀」うる心情が詠われているが、ここでは空閨の妻の想い、すなわち、本来自らがいるべき場所⇨故郷⇨回帰せよという想いと重ねられて表出されている。ただ存在するだけで空っぽな故郷などありはしない。本来いるべき場所には共にいるべき存在がいるものである。さきほど一句を借りた唱歌の「旅愁」は、「恋しやふるさと」の句に続けて「なつかし父母」と唱うが、人情の発露として自然なものである。「燕歌行」では「戀」字は直接には「故郷」に向けられているが、「戀」字を漢詩から引き継いだ三国魏の詩人たちは、故郷とともに、そこにいる家族を想うのに「戀」を用いるようになる。冒頭で触れた王粲の「從軍詩」には、「親戚」(家族)を恋うる感情と「鄴城」(帰るべき場所)を思う気持ちとが詠み込まれている¹³。特定の場所を恋うるのは、そこに特定の想いを抱く人がいるからにほかならない。辞賦作品で積極的に祖先と家族を「戀」うる表現をした曹植¹⁴の「白馬王彪に贈る」詩に「顧み瞻て城闕を戀い、領を引きて情は内に傷む¹⁵。」とあるのもそこに想いを寄せるべき人があることを思わせる。

ところで、居るべき場所から離れてしまった人の心情は、この時代の詩歌作品においていかように表現されているであろうか。鍾嶸『詩品』にも取り上げられ、曹丕の代表作のように見なされることもある「雜詩」に、客遊の人の、「我が郷に非」ざる地での寄る辺なき想いが詠じられている。詩の後半部分を掲げる。

5 吹我東南行 我を吹きて東南に行き

行行至吳會 行き行きて吳會に至る

吳會非我鄉 吳會は我が郷に非ず

安能久留滯 安んぞ能く久しく留滯せん

棄置勿復陳 棄置せらるるも復た陳ぶる勿からん

10 客子常畏人 客子は常に人を畏る

〔文選卷二十九 曹丕「雜詩二首」其二 全十句〕

詩は「客子は常に人を畏る」と結ばれている。この、「常に人を畏れる感覚は、ここは自らの居場所ではないという異他感によって引き起こされるものであるから、無条件に心魂の安寧を与えてくれる居場所（それは往々にして故郷である）に帰還するまでは消え去ることのない基底音として響き続けるものである。自らが居るべき場所やそこにいる人々を切々と恋うる感情はまさにここに生まれるのであろう。

繆襲の手に成る「魏鼓吹曲十二篇・舊邦」にも、異郷にある「游士」が「故」を「戀」うる想いが見出されるが、ここには文字通りに寄る辺なき魂も詠じられている。

舊邦蕭條 心傷悲 舊邦蕭條として 心傷悲す

孤魂翩翩 當何依 孤魂翩翩として 當に何にか依るべき

游士戀故 涕如摧 游士故を戀いて 涕摧くるが如し

〔宋書樂志四 繆襲「魏鼓吹曲十二篇・舊邦」〕

この曲辞には解題が附せられており、「漢の第五曲翁離は、今の第五曲舊邦にして、曹公の袁紹に官渡に勝ち、譙に還りて士卒の死亡せるを收藏するを言うなり（漢第五曲翁離、今第五曲舊邦、言曹公勝袁紹於官渡、還譙收藏士卒死亡也）」とある。これによれば、中原の覇者の座が定まることとなった官渡の戦いの後に、曹操が死亡した兵士たちの亡骸を収めて葬ったことを詠じていることになるが、曲辞はむしろ生者も死者も含めた帰り得ない者たちすべての魂の哭声を写したものとなっている¹⁶。

魂がどこへ帰るのかと言えば、『禮記』郊特性に「魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す（魂氣歸于天、形魄歸于地）」とあるように第一義的には天なのであろう。ただ、「舊邦」という曲辞にあつて「孤魂」が望んでいるのは故郷である。そして、このことは魂が天に帰すことと大きな齟齬を生ずるわけでもない。例えば、『禮記』禮運に、礼に関する言偃（子游）の問いに孔子が答える場面が見え、「是の故に夫の禮は必ず天に本づき、地に殺い、鬼神に列し」云々とあるが、鄭玄はここに注を施して、「……鬼者、精魂の歸する所なり、神者、物を引きて出だす、祖廟山川五祀の屬を謂うなり」と解いている¹⁷。

寄る辺なく「翩翩」たる「孤魂」が「孤」であるのは、まさし

く「戀」うる対象である「故」郷に帰り得ないことに困っている。白居易がいみじくも「新豊の折臂翁」に詠ずる¹⁾ように、従軍して不幸にも異郷に斃れ、誰にも「骨」を拾われることがなかったならば、「望郷の鬼」となって「哭く」よりほかないのである。寄る辺なくひとり彷徨う魂の帰るべき場所は故郷にほかならなく、この意味において、故郷とは魂に恋われる場と呼び得る空間なのである。

この鼓吹曲においては、寄る辺なき魂と異郷にある者が故郷を恋うる心と同質のものとして詠じられている。次章において改めて論ずることとなるが、「戀」字には魂との関わりが含意されているところがあるようである。例えば、それは、字書に解かれる字義からも少しく知ることができる。『玉篇』が「戀」を解くのに「慕」を以てしていたことから、右に『説文解字』が解く「慕」字の本義を見たが、『釋名』は「慕」を以て「墓」を積いている。

墓、慕なり。孝子思慕するの處なり。(墓、慕也。孝子思慕之處也) [釋名 釋喪制]

子が思慕する場であるので「墓」ということであるが、その際に思慕する対象は、父母をはじめとする祖先の御霊である。曹植「節に感ずる賦」にも「祖宗の靈丘を戀う(戀祖宗之靈丘)」とあるように、思慕すること、恋慕することには、魂を関わらせ

るかたちで対象を想うという一面があるように思われる。これらを受け継ぎつつ、個人的な状況を滲ませながら「戀」字を用いたのが、阮籍であり嵇康である。

阮籍の「詠懷詩」に「一身すら自ら保てざるに、何ぞ況んや妻子を戀うるをや(一身不自保、何況戀妻子)」というものがある。この詩において、どうしようもない焦燥感とともに用いられる「戀」字が向けられているのは「妻子」である。これまでも「戀」字を用いて家族を恋うる情は詠じられてきたが、この表現には、自身を見つめる視線が詠み込まれていることによって、一般化される前の具体性があるように感じられる。また、嵇康の「思親詩」には、「親は日び遠く思いは日び深し、生くる所を戀いて涙襟に流る(親日遠兮思日深、戀所生兮淚流襟)」という従前と同様の「戀」字のほかに、次のようなものが見出される。

單雄翻孤逝 單雄翻つて孤り逝き
哀吟傷生離 哀吟して生離を傷む
徘徊戀儔侶 徘徊して儔侶を戀ひ
20 慷慨高山陟 慷慨す 高山の陟

〔嵇中散集卷一「兄秀才公穆入軍贈詩十九首」其一(全二十八句)〕
詩題に表れているように、ここでも対象とされているのは同性である兄であるのだが、嵇康のこの詩において、鳥に仮託したかた

ちではあるけれども、引き裂かれた伴侶への痛切な想いが「戀」字で表現されるに至ったのである。

(3) 西晋詩の「戀」——対象の広がりとは潘岳「内顧詩」

漢詩に郷愁を詠じて始まる「戀」は、三国期に家族・祖先へと対象を拡げて用いられるようになっていった。この多様化の傾向は、故郷や家族への想いを中心に据えながら、対象に「徳」¹⁹や「行邁」(相手のこれからの道行き²⁰)等を含み込みつつ西晋期にも保たれてゆく。詩の形式としては贈答詩中に多く用いられるのを特徴の一つとする。かかる流れにあつて、西晋期の文学を代表するとされる潘岳・陸機の詩歌作品に「戀」が詠み込まれているのは自然なことであろう。

陸機には阮籍や嵇康を思わせる「物に感じて堂室を戀う、離思一に何ぞ深き」という用例のほか、擬古詩「庭中に奇樹有りに擬す」詩に、冒頭の句に「歡友」とあることから友人を想うものと解されるが、表現上は異性への情愛にも見える、「物に感じて歡ぶ所を戀ひ、此を采るも誰に貽らんと欲する」という表現が見られる²¹。

一方の潘岳の詩歌作品には、「懷縣に在りて作る二首」第一首の末尾に、「徒だ越鳥の志を懷き、眷戀して南枝を想う」という表現が見られる²²。故郷を離れている自らの想いを「越鳥」の「志」に重ねながら、「南枝」が想われて仕方がないと詠じており、従前

の表現を踏襲しつつ変奏を加えたものと言えよう²³。この「懷縣に在りて作る」詩には、続く第二首にも一箇所「戀」字が見出される。冒頭の四句を掲げる。

1 春秋代遷逝 春秋代も遷り逝き

四運紛可喜 四運紛として喜ぶ可し

寵辱易不驚 寵辱には驚かざることは易きも

戀本難爲思 本を戀いては思いを爲し難し

〔文選卷二十六 潘岳「在懷縣作二首」其二 全二十二句〕

季節の巡り、自らが居るべき場所との懸隔、これらは潘岳の詩に習見される悲哀である。既に先行研究が詳細に論じており²⁴、いま詳しくは述べないが、こうした悲哀の表現は樂府古辞や古詩に頻見され、曹丕を代表とする三国魏の詩人たちにも愛用された表現である。潘岳は、この伝統的な、安らかならざる心魂の表出の表現に「戀」字を織り込んだのである。第四句「本を戀いては思いを爲し難し」がそれであり、「本を戀」うというのは漢詩に見た故郷への想いである。ただ、ここには「戀」と「思」が異なる働きを有するものとして、あたかも「戀」と「思」の担う範囲は感情と理性とを違えているかのごとくに詠じられている。こうした「戀」字への細やかな視線や使い分けは、「戀」が詩篇の語として成熟してきていることを窺わせる。

「戀」によって詠じられる対象の拡がりや深まりは、妻という特定の異性へと向けられた「戀」情の表出を、潘岳の手から生み出させることになる。二つめの「戀」字は「内顧詩二首」第一首のなかほどに見える。

7 初征氷未泮 初め征きしとき氷未だ泮けざるに

忽焉袵絺綌 忽焉として絺綌を疹る

漫漫三千里 漫漫たり三千里

10 苕苕遠行客 苕苕たり遠行の客

馳情戀朱顏 情を馳せて朱顏を戀う

寸陰過盈尺 寸陰盈尺に過ぐ

〔玉臺新詠卷二 潘岳「内顧詩二首」其一 全十八句〕

この詩でも時の経過と道程の遙かさが詠まれ、「遠行の客」となった詩人は、第十一句に「情を馳せて朱顏を戀う」と詠ずる。詩の内容を詩人の人生と重ねるならば、「朱顏」は妻楊氏のものにほかならない。先行研究が指摘しているように、潘岳という人は、阿諛追従の人であったとされる現実社会での振る舞いとはやや異なり、夫婦生活では愛情濃やかな日々を送ったようである。その「内」を「顧」いやる詩のなかの、まさに妻の顔容を想う句に「戀」字を用いているのである。この想いは第二首にも流れ込んでゆく。二つめの「戀」字が詠まれた第二首を掲げよう。

1 獨悲安所慕 獨悲安くに慕う所ぞ

人生若朝露 人生朝露の若し

縣邈寄絶域 縣邈絶域に寄せ

眷戀想平素 眷戀して平素を想う

5 爾情既來追 爾が情は既に來り追ひ

我心亦還顧 我が心も亦た還顧す

形體隔不達 形體は隔たりて達せざるも

精爽交中路 精爽は中路に交わる

不見山下松 見ずや山下の松

10 隆冬不易故 隆冬故を易えず

不見陵澗柏 見ずや陵澗の柏

歲寒守一度 歲寒一度を守る

無謂希見疎 謂う無かれ見の疎なるを希うと

在遠分彌固 遠きに在りて分彌よ固し

〔玉臺新詠卷二 潘岳「内顧詩二首」其二〕

第一首に、この「内顧詩」が捧げられる妻を想う「戀」字が見えていたが、それと対を成すように、第二首にも第四句に、今度は「眷」や「想」という「戀」字と関わりの深い字とともに用いられている。そうして考えてみると、第一句の「慕」に始まり、人の生のはかなさと妻との埋めようのない隔たりを詠んだ句を挾

んで、第四句に「眷」「想」、第五句に「情」、第六句に「心」「顧」がまるで想いを重ねてゆくように用いられていることに気がつく。想いを重ねる表現は、第九句から繰り返される「見ずや」の問いかけや、末句に見える遠く隔たつていても夫婦の気持ちは変わらないという誓いと実によく響き合っている。

一目会いたいという想いが遂げられることはないものの、第五・六句で妻の「情」と夫の「心」は求め合い、第八句では「精爽」と言い換えられて結びつき、懸絶された夫妻の中間に交わりと表現される。この「精爽」は魂の謂いにほかならず²⁶、心魂の交わりを導く行為が第四句の「眷戀して平素を想う」なのである。前節において述べたように、「戀」字には魂との関わりが窺われるが、潘岳「内顧詩」にも同様に継承されていることが知られる。心魂を交わらせるように互いを想う夫婦の、愛情濃やかであった日々が思われる。

ところで、男女の情愛、いわゆる恋の用例として『大漢和辞典』と『漢語大詞典』に最初に挙げられているのは、『樂府詩集』清商曲辞一の子夜四時歌夏歌四に見える「春別れて猶お眷²⁷戀す（春別猶眷戀）」の句である。男女の情愛の直截な表現が短い歌のなかにならぬのは、子夜歌系統に「戀」字が用いられているわけであるので、これを挙げていることに問題はないだろう。ただ、潘岳の方が少しく先駆けるだけである。それに、高橋氏が言われる²⁸ように、潘岳が樂府古辞の養分を存分に吸収して自らの詩歌に花咲

かせていることに鑑みれば、六朝民歌である子夜四時歌の前に潘岳「内顧詩」が並んでいたとしても別段怪しむには足りない。

漢代から詩篇に現れ始めた「戀」字は、故郷から家族・祖先、更には友人へとその対象を拡げてゆき、潘岳「内顧詩」に到って妻への「戀」情を表すこととなったわけであるが、すぐれた容姿と文学の才によってかち得た、都洛陽の女性たちの恋心²⁹には目もくれずに、潘岳が一心に愛情を注いだとされる楊氏への想いを、詩歌作品の中に知ろうとすれば、「戀」字こそ用いられていない³⁰が、やはり、その死を悼んだ「悼亡詩」を見ないわけにはゆかない。章を改めて潘岳の「悼亡詩」に考察の光を当ててみることにしよう。

三 潘岳「悼亡詩」に見える句いの表現をめぐって

潘岳の文学に関する先行研究には既に充実した成果があり³¹、「悼亡詩」についても十分に検討がなされているので、「悼亡詩」の全体像についての新たな知見を本稿が加え得るわけではない。ただ、妻を「戀」うることを詠じ、それまでの用例から一歩踏み出すかたちで「戀」字を用いた潘岳の手に成る作品であるという視点より、詩人の恋情がいかにように表現されているかについて検討を加えることにはいささかの意味があると考えられる。本章では、

第一首に見られる句いの表現を端緒として、魂の詠じられ方により多くの視線を注ぎながら考察を試みることにしたい。

潘岳の「悼亡詩」は三首より成る。三首が連作を企図して作られたものであるか否かについてひとまず措くとすれば、つとに高橋和巳氏が例を挙げつつ指摘されている³²ように、江淹「雜体詩」が「數」うべき「文體」として選んだことをはじめとして、歴代の詩家によって「悼亡詩」が潘岳の詩歌作品の代表作と見なされてきたということについて異論が呈されることはないように思う。『晉書』の本伝に「辭藻絶めて麗しく、尤も善く哀誄の文を爲る（辭藻絶麗、尤善爲哀誄之文）」とあるのは、唐初に『晉書』が編まれるまでの潘岳評を概括し、その後の評価にも一定以上の影響を与えたものと考えられる。興膳宏氏が言われるように、「ひたすらな悲哀の流露を特色とする潘岳の文学がもつとも得意とした領域、それは人の死を悼む哀傷の詩文にあるとするのが、古来の定評であった」³³のであり、「悼亡詩」はその典型的作品であると言えよう。そして、三首であることについては、これも高橋氏が述べておられるように、『文選』が三首すべてを収めたことが概ね引き継がれていることに鑑みれば、たとえ結果的にということがあったとしても、「悼亡詩」は三首を以て一結構を具えた作品であると見なして差し支えないであろう。紙幅の都合で三首の全ての句に触れることは叶わないが、考察の姿勢としては本稿でも三首を一連の作品として扱うことにしたい。

「悼亡詩」の特徴として第一に指摘されるのは、時の移ろいが基調音を成すことである。それはすでに第一首の冒頭に色濃く表れている。

1 荏苒冬春謝 荏苒として冬春謝し

寒暑忽流易 寒暑は忽ち流易す

之子歸窮泉 之子窮泉に歸し

重壤永幽隔 重壤は永く幽隔す

5 私懷誰克從 私懷誰か克く從わん

淹留亦何益 淹留するも亦た何の益かあらん

僣俛恭朝命 僣俛として朝命を恭み

迴心反初役 心を迴らして初役に反る

時の移ろいは、心痛を和らげるものである一方で、死者との隔たりを否応なく厚いものにしてゆく。第四句の「重」と「永」と「隔」は、過ぎゆく時と絶望的に響き合う。そして、第五句からの四句に、この詩の時の流れが異質な時間／空間への推移でもあることが詠じられる。詩人には悲哀の淵から引き上げることが要請されており、いわば、この時の詩人は、悲哀に塗り込められた服喪の時間と感情を押し殺す現実の時間という二類の時間の狭間にあり、狭間の詩人は亡き妻のことを想いながら家を眺め部屋に入るのである。

望慮思其人

廬を望んで其の人を思い

10 入室想所歴

室に入りて歴し所を想う

帷屏無髣髴

帷屏に髣髴する無く

翰墨有餘跡

翰墨に餘跡有り

流芳未及歇

流芳は未だ歇むに及ばず

遺挂猶在壁

遺挂は猶お壁に在り

15 悵恍如或存

悵恍として或いは存するが如く

周遑忡驚惕

周遑として忡え驚惕す

かつて楊氏がいた空間に入っても、「帷屏」に面影が見出されることとはなく、「翰墨」の跡形が遺されているばかりである³⁴。当然のことながら視線のうちに妻を捉えることは叶わない。何と言っても妻はもう死んでいたのであり、時の流れは巻き戻せるものではない。しかし、あることを契機として時の流れが常とは異なることもまたあるものである。第十三・十四句の「未」「猶」の両字に導かれるかのように、詩人は亡き妻の遺した衣から漂う芳香を聞き、妻がそこにいるかのような——これは決して甘美なものとはならず、妻がいるかのように感じた分だけ苦い哀しみを増すものであるが——錯覚に囚われることになる。この錯覚が詩人にとって心魂を驚掴みにされるような衝撃を伴っていたことは、続く第十五・十六句に湧き出たかのごとくに列ねられる「悵恍」（ぼん

やりとする）「周遑」（あわてうろたえる）「忡」（うれう）「驚惕」（おろおろとする）という感情の表現から知られる。

この、詩人の胸中に溢れ出した多くの感情を詠じた、印象深い表現³⁵は、亡妻の残り香に触れたことによって生まれているわけであるが、詩人がふと妻はまだ生きているのではないかと思っただけなのはなぜだろうか。

嗅覚について説明が進む今日のわれわれにとつてみれば、情動的記憶が匂いによって喚起されることが多い³⁶。ことに関連づけ、いわゆる「ブルースト現象」として考えることが理解しやすいものである。その一方で、匂いが妻の衣服から聞こえてきたものであることに注目してみると、この表現に関して、また少し別の面から考察することが可能であるように思われる。古来死者の魂を呼び戻す招魂儀礼において、死者の衣服は魂の「依代」として用いられたのであった³⁷。『禮記』喪大記によれば、「復」と称される招魂儀礼では、主君・夫人以下それぞれの身分に応じて、「卷」（袞服）や「屈狄」といった衣服が用いられた³⁸という。招魂儀礼において強く意識されているのは、当然のことながら霊魂であるが、霊魂や神に祈りを捧げるに際して、特に周代にあつては、匂いが重要視されていたことが同じく『禮記』の郊特性に記されている。

有虞氏の祭や、氣を用うるを尚ぶ。血腥爛にして祭るは、氣

を用うるなり。

殷人は聲を尚ぶ。臭味未だ成らざるに、其の聲を滌蕩す。樂三たび闋りて、然る後に出でて牲を迎う。聲音の號は、天地の間に詔告する所以なり。

周人は臭を尚ぶ。灌ぐに鬯臭を用う。鬱鬯に合し、陰に臭して淵泉に達す。灌ぐに圭璋を以てするは、玉氣を用うるなり。既に灌ぎて然る後に牲を迎う、陰氣を致すなり。蕭を黍稷に合せ、陽に臭して牆屋に達す。故に既に奠して然る後に蕭を炳きて羶薌に合す。凡そ祭には諸を此に慎む。

魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す。故に祭は、諸を陰陽に求むるの義なり。殷人は先ず諸を陽に求め、周人は先ず諸を陰に求む。

(有虞氏之祭也、尚用氣。血腥爛祭、用氣也。殷人尚聲。臭味未成、滌蕩其聲。樂三闋、然後出迎牲。聲音之號、所以詔告於天地之間也。周人尚臭。灌用鬯臭。鬱合鬯、臭陰達於淵泉。灌以圭璋、用玉氣也。既灌然後迎牲、致陰氣也。蕭合黍稷、臭陽達於牆屋。故既奠然後炳蕭合羶薌。凡祭慎諸此。

魂氣歸于天、形魄歸于地、故祭、求諸陰陽之義也。殷人先求諸陽、周人先求諸陰) [禮記 郊特牲]

ここで「周人」に「尚」ばれるものとして匂いが挙げられ、そのことが「香」字や「芳」字ではなく「臭」字によって表記されて

いることは象徴的である。匂いと魂に深く関わりがあるとすれば文化が少なくないと云われる³。ことがあるが、「自」^{はな}の字を「自」^{みずから}の字として用いる⁴。こととした漢字文化圏は、おそらく本来的にはそうした文化との親和性が高いはずである。目には見えないけれど、確かに存在するものという共通項を媒介にして成立すると思われる、こうした感覚は、今日のわれわれからすれば、目に見えないというまさにその一点によって心許ないものと映るが、匂いを介して神や祖先と繋がると考えていた人々にとってみれば、間違いなくそこに在るものであったのである。そうであるからなのであろう、やがて失われるものであることをより実感的に理解してもいるのである。

「流芳未だ歇むに及ばず 遺挂猶お壁に在り」

「未」字はまだ尽きていなくて、そこに漂っていることを意味すると同時に、やがては尽きてしまうことを含意している。このことは亡妻を悼む時間がそれほど多くはのこされていないことを告げてもいる。更に、右に触れた『禮記』喪大記の「復」に関する記述の末尾には「唯哭するには先ず復す、復して後に死事を行う」とある。すなわち、「復」は死者の魂を呼び戻す行為であると同時に、葬儀の起点でもあったのである。このことを併せ考えれば、「猶お壁に在る」遺挂「から漂う」、「未だ歇むに及ばない」流芳」には、二度と引き返すことのできない、終わりの始まりの意味も含まれていると言えそうである。

詩人は、この後、「雙栖」の鳥や「比目」の魚が連れ合いを失ったようなのだと自らを喩え、妻と寝起きをもにしたことはいつになっても忘れられるものではなく、深い憂いは降り積もってゆくのだと嘆き、時の流れのなかで悲しみが衰えることがあることを期待して第一首を結ぶ。

25 庶幾幾有時衰 庶幾わくは時に衰うる有らん

莊缶猶可擊 莊缶 猶お撃つべし

〔文選卷二十三 潘岳「悼亡詩」其一 全二十六句〕

第一首に見られた句いの表現は、亡き妻の魂と重ね合わされており、詩人は句いを仲立ちとして魂に触れたと錯覚するのであった。得ようとして（あるいは、得たと思つて）得られない現実が突きつけられるという図式は第二首にも繰り返される。季節の移ろいが皮膚感覚にもたらず変化を詠じる冒頭部分を承けて、やがて亡妻の不在が沁みるように感じられてゆくのが中盤部分以降である。

11 展轉眇枕席 展轉して枕席を眇れば

長簟竟牀空 長簟は牀の空しきに竟る

牀空委清塵 牀は空しくして清塵に委ねられ

室虛來悲風 室は虚しくして悲風來たる

15 獨無李氏靈 獨り李氏の靈の

髣髴覩爾容 髣髴として爾の容を覩ること無し

撫衿長歎息 衿を撫し長歎息し

不覺涕霑胸 覺えず涕は胸を霑す

霑胸安能已 胸を霑すは安んぞ能く已まん

20 悲懷從中起 悲懷中從り起ころ

寢興目存形 寢興に目は形を存し

遺音猶在耳 遺音は猶お耳に在り

上慙東門吳 上は東門吳に慙じ

下愧蒙莊子 下は蒙莊子に愧ず

25 賦詩欲言志 詩を賦して志を言わんと欲するも

此志難具紀 此の志具さには紀し難し

命也可奈何 命や奈何すべき

長戚自令鄙 長く戚いて自ら鄙しからしむ

〔文選卷二十三 潘岳「悼亡詩」其二 全二十八句〕

第十一句の「眇」は「牀空」を、「牀空」は「室虚」「悲風」を、

視覚から触覚へと感覚を移らせながら順に引き起こしてゆく。こうして妻不在の状況についてあらためて認識してゆくことがそのまま悲哀の度を深めてゆくことになっており、そのことを更に際立たせるように、続く第十五・十六句に漢の武帝と李夫人にまつわる故事が典故として用いられる。

「獨り李氏の靈の 髣髴として爾の容を覩ること無し」

先行研究が指摘するように、第一首にもその影は仄見えていたのであったが、ここでその名が明示される。武帝の寵愛を一身に受けていた李夫人が早世する前後の経緯を『漢書』外戚傳は詳述する⁴¹。なかでもよく知られるのは、『搜神記』(卷二)にも収められている、招魂された茫乎たる李夫人の姿を見た武帝が、「まことか、うそか(是邪、非邪)」と歌う場面であろう。この場面も含め、『漢書』外戚傳の李夫人の條は、病床にある夫人を見舞った武帝がいくら説得してもそのかんばせを見ることができなかったのを中心、徹底して視覚が阻碍された物語として読むことができる⁴²。後世、「返魂香(反魂香)」という物語が生み出されることになった⁴³のは、伝統的に香りが魂に通ずるものと見なされていたこととともに、原物語である『漢書』において視覚が阻碍されたことにも一因を求めることができるように思う。これはまた、第一首に見た、残り香によってそこに妻がいるかのように感じたという表現とも通底するものとして理解される。

潘岳は「悼亡詩」に典故として李夫人の故事を用いたが、それは単に「妻」という存在を喪った哀しみを同じくするものとして重ね合わせるためではない。李夫人を詠じ込むことによって、亡き人の芒乎とした面影さえ見られない喪失感武帝のものを上回るのだと言わんとしているのであり、第一首において詠じた、句いによって喚起された感情の表現を深めてゆくのである。その後

の句で悲しみそのものが続けて描写されることを見ると、第二首における詩人の悲哀はここに極まっているように感じられる。

亡妻の姿を見たいが見られない。視覚的欲望が満たされないことへの嘆き。その思念が形をなしたかのよう、第二十一・二十二句に、寝ても覚めても目のなかにそなたの姿があり耳には生前の声が遺っている、という表現が見える。しかし、それとても期待と失望の振り子にしかならず、第二十五・二十六句に、詩を賦して想いを記したいと思うけれど、つぶさに記すことはできないのだ、と述べることになる。悲嘆の想いを詩にして詠むということとは、確かに感情の昇華にもなるが、その一方で、ともすれば哀しみに彩られた言葉に引き込まれてしまうことにもなりかねず、それに抗うためというばかりでなくとも、およそ似つかわしくない、言葉を揃え、形を整えるという「理」が必要になる。この意味においては、已むことのない悲しみを詠うという行為は、本質的に矛盾を孕む営みなのであり、詩人の筆はまさにそこを捉えているのである。

第一首で句いによって喚起されたものは、単に亡妻の記憶というにはあまりに生々しい、まるでそこにまだ彼女がいるのではないかと感じたか錯覚であり、魂に触れたとでも呼ぶべきものであった。続く第二首では、李夫人の物語に重ね合わせながら、李夫人の魂に触れ得たかも知れない武帝の悲哀より深い悲しみに沈む自らを詠じた。これらの、亡妻の魂に関わる描写は第三首にある

種の諦念を見出すことになる。第三首第二節中の亡妻の衣服に關わる句に続いて、第三節に当たる箇所を掲げることとしよう。

爾祭詎幾時

爾が祭詎ぞ幾時ならん

朔望忽複盡

朔望忽ち複た盡く

15 衾裳一毀撤

衾裳一たび毀撤すれば

千載不復引

千載復た引べず

……

……

25 徘徊不忍去

徘徊して去るに忍びず

徙倚步踟躕

徙倚して歩みて踟躕す

落葉委埏側

落葉埏側に委り

枯荜帶墳隅

枯荜墳隅を帶る

孤魂獨煢煢

孤魂は獨り煢煢たり

30 安知靈與無

安んぞ知らん靈あると無きとを

投心遵朝命

心を投じて朝命に遵い

揮涕強就車

涕を揮いて強いて車に就く

誰謂帝宮遠

誰か謂わん 帝宮は遠しと

路極悲有餘

路極りて悲しみは餘り有り

〔文選卷二十三 潘岳「悼亡詩」其三 全三十四句〕

妻の死より一年余り、公務に復帰しつつ、私的な服喪も続けるなかで、妻を祭ってその魂に触れられる時間が短いと嘆き、遺さ

れた衣服を捨ててしまったら永遠に広げられることがないと嘆く。第十五句の「衾裳」は第一首に見えた「遺挂」を含むであろう。

それこそは亡き妻の匂いをもっとも含み込んだものであった。こうして「歇」みつつある匂いに想いを募らせながら、墓参した足がそこを離れることをためらうことを詠ずるのを承けて、第二十九・三十句に「魂」と「靈」が詠み込まれている。

「孤魂は獨り煢煢たり 安んぞ知らん靈あると無きとを」

ここで詩人が問いかけているのは靈魂の有無である。一つの区切りをつけようとしているのであろう、それまで触れたいと願っていた靈魂について、あるのかないのかわからないと言い、「心を投じて朝命に遵い 涕を揮いて強いて車に就く」のである。妻の死を自らの人生の一部に収斂させてゆこうとするかのようなこの句は、第一首に生じた「悵怳として或いは存するが如く 周遑として仲え驚惕す」という感覚に対する詩人の答えでもある。

しかし、わからないという答えは「無い」ことにはならない。常に両義的で、すぐさま「有る」に転じ得るのである。後漢末の乱世にあつて際立った合理主義者に見えた、かの曹操にも、もし靈魂というものがあるならばと自問することがあつたと伝えられる⁴のは、この問いがいかに拭いきれないものであるかをよく物語っている。つまり、あるのかないのかわからないなどと言つてみたところで悲哀が消え去るわけではないのであり、そのことは、末句の末字に「餘」を配した詩人自身がよく知っていることであ

る。「餘」は、第一首の「未」字がそうであったように、悲哀の調べがいつまでも響くこと、そして、それすらもやがては「歌」むことがあることを表している。

本章の冒頭に述べたように、潘岳「悼亡詩」には全篇にわたって時の流れが詠み込まれている。しかし、その時の流れは決して一様ではない。なかんづく、生きる者には生きる者の時間が流れ、死せる者には死せる者の時間が流れるわけであるから、時の流れは亡き妻の魂との懸隔を厚くしてゆくものにはかならない。死者を悼むとは、生者の時間と死者の時間、この二つに引き裂かれながら二つながら同時に向き合うことの謂いであるのかも知れない。その時、悼む者の心は、変わらないことを願いつつ、変わることをどこかで期待しているのではなからうか。

実際のところ、時の流れのなかで悼む人もまた変わらざるを得ない。「悼亡詩」にあっても、妻の魂への向き合い方は少しく変化を見せていた。これまでも繰り返した述べたように、目には見えなけれど確かに存在する（と感じられる）という意味において、匂いには魂との類似性が認められる。こうした性質に拠りながら、匂いは、いかに抗おうとも時とともに移ろわざるを得ない、亡き人の魂との関係性を象徴的に表現するものとして「悼亡詩」に詠まれたように思われる。時間をかけながらやがて尽きてゆく匂いこそが、亡妻を想う詩人の心情に同期して寄り添うものであったのだと考えたい。そして、それはまた、「内顧詩」において妻に「戀」

情を向けたことも轍を一にしているのである。

結びに代えて——恋にゆれる心ひとつ

本稿ではこれまで、漢魏西晋期の詩歌作品において「戀」字の辿った道筋と、潘岳の「悼亡詩」に見られる匂いの表現の有する意味について考察を試みてきた。その過程において、「戀」字には、遠く離れて望み得ないが、心から大切であると感じられるものに対して已むことなく焦がれるという意味があり、匂いの表現には、目にはさやかに見えないけれど、やはり間違いないそこに在ってわれわれの心に深く訴えかけるものとして立ちのぼるという意味があることが明らかになったと考える。「戀」と匂いには共通するところがあるが、それは両者に認められる魂との類似性とも関わりがあり、この意味においては、「戀」字を詩歌作品に積極的に用いた潘岳の手に成る「悼亡詩」に匂いの表現が印象的になされていたことは、むしろ自然なことと言わねばならない。

潘岳よりやや年長で、同じ時代を生きた何劭⁴が作った、ある士人の伝記のなかに、亡妻への切なる想いを窺わせるものが見出される。詩歌辞賦作品ではなく、「戀」字が出てくるわけでもないが、潘岳の「悼亡詩」とはまた違ったかたちで、しかし、どこか響き合うようにして恋情が浮き彫りにされているように思われる。

そこで、この文章から滲み出てくる恋情について若干の考察を行い、本稿がその一端でも捉えようとしてきた「戀」情に別の角度から光を当てることを以て結びに代えることとしたい。

後漢末の乱世、いわゆる三国志の時代の前半にあつて、「魏」の曹操の参謀として中心となつて支えたのは、曹操自身に「吾が子房（漢の高祖劉邦の謀臣張良）なり」と云わしめた、荀彧である。

何劭が作ったのは、この荀彧の息子の一人荀粲の伝⁴である。荀粲の人と為りや妻との関わりが窺われる箇所を掲げることとする。

何劭粲の傳を爲りて曰く、粲字は奉倩。粲の諸兄並びに儒術を以て論議す、而るに粲は獨り好んで道を言い、常に以爲えらく、子貢は夫子の性と天道とを言うは、得て聞くべからずと稱す、然らば則ち六籍は存すと雖も、固より聖人の糠粃なるのみ、と。粲の兄僕難じて曰く、「……」と。粲答えて曰く、「……」と。當時の能く言う者も屈する能わざるに及ぶ。……粲常に以えらく婦人なる者は、才智は論ずるに足らず、自ずから宜しく色を以て主と爲すべし、と。驃騎將軍曹洪の女は美色有り、粲是に於いて焉を媾る。容服帷帳甚だ麗しく、房を専らにして歡宴す。歴年の後、婦病みて亡る。未だ殯せざるに、傳嘏往きて粲を嗔う。粲哭せずして神傷る。嘏問いて曰く、「婦人才色並びに茂んなるを難しと爲す。子の娶るや、才を遺てて色を好む。此れ自ら遇い易し。今何ぞ哀しむことの甚だしきや」と。粲曰

く、「佳人再びは得難し。顧るに逝く者は傾國の色有る能わざるも、然れども未だ之を遇い易しと謂う可からず」と。痛悼して已む能わず、歳餘にして亦た亡る、時に年二十九。……

〔三國志卷十 荀彧傳注引「荀粲傳」〕

妻をめとらば才たけて、みめ美わしく情ある——よく知られる与謝野鉄幹「人を恋ふる歌」の冒頭部分には、条件というよりも理想として結婚相手に具えて欲しい性質が謳われているが、荀粲は、この引用になぞらえて言えば、前半を捨てて後半を取るように女性の容貌を第一の条件と考えていて、それを公言してもいたようである。そうしてその考えのままに、「美色有」る曹洪の娘を娶り、仲睦まじく暮らしていたのである。ところが、数年の後、荀粲は愛妻曹氏に先立たれてしまう。

自失する荀粲のもとを友人である傳嘏が弔問に訪れ、荀粲の婚姻について触れた。君は娶るに際して、才を遺てて色を好んだのだ。そのような女性とはこれからまためぐり逢えるだろう。なぜそんなに哀しんでいるのか、と。この問いかけは、平生の二人の間のやり取りを知る者からすれば、それほど意外ではなく、いつものことと感ずる類のものであろう。彼らは常に自分の主張を理屈に載せてぶつけ合う⁴⁷のであるから。ただ、今ばかりは、妻を亡くして自失している友人に向けての問いかけである。あるいは、純粹な疑問というよりは、むしろ荀粲の人と為りを理解する

数少ない友人の一人として、荀粲の心に寄り添いつつ慰撫せんとする気持ちから発せられたものであったのかも知れない。そもそも荀粲に友人が少ないのは、尊大で齒に衣着せぬ物言いをするから⁴であるが、それに相手を論破する能力が添えられているのだから始末が悪い。そんな人間に対して友人を自任する傳嘏である。彼には荀粲を確かに理解し得ているという自負もあつたはずである。

傳嘏の発話で前提となつている「才を遺てて色を好んだ」という言葉は、曹氏を娶る前の荀粲が常々言つていた言葉——婦人なる者は、才智は論ずるに足らず、自ずから宜しく色を以て主と爲すべし（女性というものは、頭の出来など問題にはならない、とにかく見た目が大切なのだ）——を言い換えたものにほかならない。そして、実際、そのような方針と合致する、「美色」の所有者である曹氏を選んだわけであり、少なくともその時点までの荀粲の言動には理屈に適う一貫性が保たれている。あくまでも荀粲を理の人として扱う傳嘏は、荀粲自身の理に則りながら、荀粲を説得しつつその心を慰撫することが可能となると考えたのであろう。しかし、荀粲の答えは意外なものであつた。

——そんなことを言つてくれるな。あんな人にはもうめぐり逢えないのだ。

慰安したいという気持ちがあつたとすれば、こんな風に答えられた傳嘏はいい面の皮である。ただ、人を、特に異性を想う気持ち

ちは、安易な言語化を許さないところがある。荀粲が好んだという老荘の書に渾沌のままにあることの重要性が説かれている一段が見える⁴。が、恋情はまさにそのように渾沌としているのが本態であり、理屈では切り分けられないものなのであろう。異性への恋情ではないものの、右に見た潘岳の「懷縣に在りて作る」詩に「本を戀いては思いを爲し難し（戀本難爲思）とあつた」ときは、「戀」字の意味を端的に表しているものといえよう。

荀粲の本心がどこにあつたのかについては、もとより確答を得ることなどできはしない。ただ、ここでは、「當時の能く言う者も屈する能わざるに及ぶ」と評されるような人物であつた彼の論理が破綻していることに注目しておきたい。荀粲の言動のなかに窺われる亡妻への想い——それは恋情と呼んでもいいものである——は、婚前に女性観を公言して友人たちと共有していたこととは矛盾する、決して他者に開かれた論理には乗らない、至つて個人的なものであつた。すなわち、論理が破綻をきたし他者と共有されるかたちでは言語化されないと、言ってみれば、論理の手が及ばないところにこそ、荀粲の、妻曹氏に対する想いの本質があつたということである。このことは、潘岳が「悼亡詩」において亡妻楊氏への想いを詠つて、句いを詠じ込んだ際に、その描写に続けてなされた感情の表現が充分には整理されないものであつたことや、詩を賦すことについて、想いを記したいがつづさに記すことはできないと詠じたこととも通底していよう。第一章で

「戀」字の成り立ちについて触れて、「攣」字を出自とする可能性を述べたが、あるいは、「戀」は会意的に成り立ったのかも知れない。「戀」字を『説文解字』は、「亂なり。一に曰く治なり。一に曰く絶えざるなり。言絲に従う」と解く。¹。「亂」と「治」の間に揺れ続ける心こそ、本稿で追いかけてきた「戀」字には相応しく思われる。

「悼亡詩」三首や「悼亡賦」「哀永逝文」といった作品が楊氏のみ宛てられて詠まれたものではないのと同様に、「内顧詩」二首もまた楊氏一人に読まれることが期待された、いわゆる恋文ではないだろう。ただ、この「内顧詩」ばかりは、生前の楊氏も読むことが可能であった作品である点において、意味を少しく異にしている。

漢魏の頃までの「戀」字は、故郷を想うことを起点として、先祖や家族を思慕する感情を映し出すものとして用いられていたわけであるが、西晋に至って対象が広がりを見せるなかで、潘岳はそれまでの「戀」字を承継しつつ、一人の異性である妻へ向けた、うまく言の葉に載りにくい想いを詠ずるのに「戀」字を用いた。こうでなければ表現し得ないと詩人が考えたのだとしたら、それは、この時代における恋情の再発見とも呼び得るものである。

「内顧詩」を、詩を宛てられた当の本人である楊氏も実際に読むことがあり、言語化はし難いだけでなく確かに心に満ちている想いがあって、それが「戀」字に込められているのだと伝わった

としたら、「内顧詩」はその題の示すままに素敵な恋文となったことであろう。安易な言語化を拒み、理屈でもなく定量できるものでもない、恋にゆれる心は、どんな時でも特別で一つきりである。そして、だからこそ、人はそれを言葉にしたいと切に願うのである。

注

¹ 遼欽立『漢魏六朝文學論集』（陝西人民出版社、一九八四年）

第一編「漢詩別録 辨偽第一 甲蘇・李詩」は、宋斉の時期まで蘇武詩に言及する文献が見当たらないこと、用語に後漢末のものだと思われるものがあることを踏まえて、蘇武の詩はすべて後漢の李陵集から出たものであるとする。同『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年第一版／一九九五年北京第三次印刷）漢詩卷十二・古詩は、この詩を「後漢文士」の手に成る「李陵別詩」として収めて、同様のことを述べ、『古今同姓名録』には「後漢の李陵」が存在していることも記している。

² 諸子のなかでは、後世の成立かと考えられる『列子』に一例見られる。張競『恋の中国文明史』（筑摩書房、一九九三年。のち一

九九七年、ちくま学芸文庫)「序章・第二節「恋とその言語表現」参照。

³ 范睢曰、「汝罪有三耳。……然公之所以得無死者、以綈袍戀戀、有故人之意、故釋公。」乃謝罷。入言之昭王、罷歸須賈。

〔史記卷七十九 范睢蔡澤列傳〕

『漢書』にも「戀戀」が王商史丹傳の史丹の伝に一例あり、加えて「攣攣」が外戚傳の李夫人の條に一例見えているが、後者について顔師古が次のように注をしている。

夫人曰、「所以不欲見帝者、乃欲以深託兄弟也。我以容貌之好、得從微賤愛幸於上。夫以色事人者、色衰而愛、愛則恩絕。上所以攣攣顧念我者、乃以平生容貌也。……」

師古曰、攣音力全反、又讀曰戀。

〔漢書卷九十七上 外戚傳上 孝武李夫人〕

顔師古は『漢書』本文中の「攣」字を「戀」に読みかえられると云う。これは、「攣攣」と「戀戀」が通ずるものであることと、顔師古の時代にあつては、このような場合に用いられるものとして、「攣攣」よりも「戀戀」の方が解されやすいものであつたことを示しているが、必ずしも「戀戀」が古い形であると言えるものではない。『漢書』には、史丹傳の「意中戀戀」のほか、張騫傳の「蠻夷戀故地、又貪漢物」云々というのがある。

⁴ この傾向は、辭賦作品についても同様であり、『先秦・兩漢・三國辭賦索引』(富永一登・張健編、研文出版、一九九六年)にあつては、漢代を遡る用例は見出されない。

⁵ 『四庫提要』經部一・易類一・子夏易傳十一卷。

⁶ 注2前掲書は、「戀」字に関わるものとして、慕・思・色・愛情等の字を挙げてゐる(序章・第二節「恋とその言語表現」)。

⁷ 「旅愁」犬童球溪作詞

更け行く秋の夜 旅の空の わびしき思いに ひとりなやむ 恋
しやふるさとなつかし父母 夢にもたどるは 故郷の家路

⁸ 『古文苑』卷八は「蘇武」答詩」とする。

⁹ 注2前掲書は、丁福保の分類に従つて該詩歌を漢代のものとして扱う。また、同書は漢代の、異性を想う情を詠じたもう一つの用例として、漢の枚乗の「雜詩」(蘭若生春陽)を挙げるが、遼欽立書は、現行『玉臺新詠』(卷一)が収める詩についても、「古詩」として扱い、「戀」を「念」に作つてゐる。ちなみに、「雜詩」(蘭若生春陽)は『文選』が唯一「古詩十九首」としていないものでもある。

¹⁰ この箇所について王逸は、そのまま「慕」字を使つて、「子謂山鬼也。窈窕、好貌。詩曰、窈窕淑女。言山鬼之貌、既以姱麗、亦復慕我有善行好姿、故來見其容也」と注している。

¹¹ この歌辭は、『宋書』樂志に収められており、歌辭が並べられる前の一段に次のように記されている。

相和、漢舊歌也。絲竹更相和、執節者歌。本一部、魏明帝分爲二、更遞夜宿。本十七曲、朱生・宋識・列和等復合之爲十三曲。
〔宋書樂志三〕

¹² 遙遙山上亭、皎皎雲間星。遠望使心懷、遊子戀所生。驅車出北門、遙望河陽城。

〔藝文類聚卷二十七 曹丕「於明津作」詩〕

¹³ 涼風厲秋節、司典告詳刑。我君順時發、桓桓東南征。汎舟蓋

長川、陳卒被隰垆。征夫懷親戚、誰能無戀情。拊衿倚舟檣、眷
眷思鄴城。……〔文選卷二十七 王粲「從軍詩五首」其二〕

『文選』所収のものには「戀情」という語が見出され、「親戚」を
対象として「戀情」が起動していることが看取される。ただ、冒
頭にも触れたように、『藝文類聚』（卷五十九）に収められている
該詩には「戀」字はなく、「誰能無此情」に作っている。

¹⁴ 曹植の辞賦作品には、「感節賦」や「懷親賦有序」、「慰子賦」
等に「戀」字の用例が認められるほか、「離思賦有序」や「釋思賦
有序」の序にも「戀」字が用いられている。

¹⁵ 伊洛廣且深、欲濟川無梁。汎舟越洪濤、怨彼東路長。顧瞻戀
城闕、引領情内傷。〔文選卷二十四 曹植「贈白馬王彪」其一〕

¹⁶ 軍樂である鼓吹曲の歌辞にこうした表現が見られるというこ
とは、あるいは、「戀」字を用いて故郷を恋うる気持ちが一層広汎
に理解されるものであったことを意味するかも知れない。

¹⁷ 言偃復問曰、「如此乎禮之急也」。孔子曰、「夫禮、先王以承天
之道、以治人之情、故失之者死、得之者生。詩曰、相鼠有體、
人而無禮。人而無禮、胡不遄死。是故夫禮必本於天、殺於地、
列於鬼神[※]、達於喪・祭・射・御・冠・昏・朝・聘。故聖人以
禮示之、故天下國家可得而正也」。

〔※鄭注〕聖人則天之明、因地之利、取法度於鬼神以制禮、下教
令也。既又祀之、盡其敬也、教民嚴上也。鬼者、精魂所歸、神
者、引物而出、謂祖廟山川五祀之屬也。〔禮記 禮運〕

¹⁸ 白居易の「新豐折臂翁」に、次のような句が見えるが、まさ

に故郷から離れた地で戦没した者たちの想いであろう。

不然當時瀟水頭、身死魂孤骨不收。應作雲南望鄉鬼、萬人家
上哭啾啾。〔白氏文集卷三「新豐折臂翁」〕

¹⁹ 軒冕袞袞、冠蓋習習。戀德惟懷、永歎弗及。

〔藝文類聚卷二十九 張華「祖道趙王應詔詩」〕
²⁰ 悠悠塗可極、別促怨會長。銜思戀行邁、興言在臨觴。

〔文選卷二十五 陸雲「答兄機二首」〕

²¹ 感物戀堂堂、離思一何深。

〔文選卷二十六 陸機「赴洛二首」其一〕

歡友蘭時往、苕苕匿音徽。虞淵引絕景、四節逝若飛。芳草久
已茂、佳人竟不歸。躑躅遵林渚、惠風入我懷。感物戀所歡、采
此欲貽誰。〔文選卷三十 陸機「擬庭中有奇樹」〕

このほか、陸機の文章には、「戀」を「執着」の意で用いている
と思われるものも見出される（「大暮賦序」「弔魏武帝文」）。また、
弟の陸雲には、誄や讚のほか、友人に宛てた書簡や詩のなかに「戀」
字を頻用している。

²² 自我違京輦、四載迄于斯。器非廊廟姿、屢出固其宜。徒懷越
鳥志、眷戀想南枝。

〔文選卷二十六 潘岳「在懷縣作二首」其一〕

²³ 夏侯湛「夜聽笛賦」にも「越鳥戀乎南枝、胡馬懷夫朔風」と
いう同様の表現が見られる。

²⁴ 高橋和巳「潘岳論」『中國文學報』第七冊（一九五七年）、の
ち「高橋和巳作品集 9 中国文学論集」（河出書房新社、一九七二
年）所収（本論「一」）参照。

²⁵ この点に関して、興膳宏氏は、「政治的には、過酷な乱世の波に余儀なくされたとはいいながらも、いくたびかの変節を重ねてきた潘岳だったが、身近な人々ととりわけ妻子に注ぐ愛情は、常人以上に純粹だった。」『潘岳 陸機』（筑摩書房、一九七三年）一四頁）とされ、松本氏は、摯虞の「新婚箴」を挙げつつ、「いつの時代も男女の再婚はめづらしいことではないのに、ことさらに潘岳の再婚を揶揄するのは、かえって潘岳が終生その妻をいとしみつづけてきたからである。」『魏晉詩壇の研究』（朋友書店、一九九五年）五五八頁）と述べられる。

²⁶ 潘岳「寡婦賦」（文選卷十六）にも「睇形影于幾筵兮、馳精爽于丘墓」と、靈魂の意で「精爽」が用いられている。

²⁷ 春別猶眷戀、夏還情更久。羅帳爲誰褰、雙枕何時有。

〔樂府詩集卷四十四 清商曲辭一〕

宋本は「眷戀」を「春戀」に作るが、中華書局本の校語に従って改める。

²⁸ 注24前掲高橋和巳「潘岳論」参照。

²⁹ 潘岳が容姿にすぐれ、詩才に溢れていたこと、また若いころに彼に恋心を抱く女性が少なくなかったであろうことについて、『世説新語』等の記述を襲いながら、『晉書』の本伝は次のように伝える。

岳美容儀、辭藻絶麗、尤善爲哀誄之文。少時常挾彈出洛陽道、婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而歸。

〔晉書卷五十五 潘岳傳〕

³⁰ 楊氏の死後、「悼亡詩」に先行して作られたと考えられる「悼

亡賦」（藝文類聚卷三十四）には、「目眷戀以相屬」という表現が見出される。

³¹ ここでは、本稿が成るにおいて特に示教を得た先行研究を掲げることとする（わが国のものに限った）。

・高橋和巳「潘岳論」『中國文學報』第七冊（一九五七年）、のち『高橋和巳作品集9 中国文学論集』（河出書房新社、一九七二年）所収）

・内田泉之助・網祐次『文選（詩篇）上』（明治書院、一九六三年）（潘岳「悼亡詩」は網氏が担当）

・興膳宏「妻にささげる哀歌——悼亡詩——」『潘岳 陸機』（筑摩書房、一九七三年）一一一—一三七頁）

・同「潘岳年譜稿」『名古屋大學教養部紀要』第一八号（一九七四年）、のち『亂世を生きる詩人たち』（研文出版、二〇〇一年）所収）

・松本幸男「潘岳の傳記」『立命館文學』第三二二号（一九七二年）

・同「潘岳の「悼亡詩」について」『學林』第三号、一九八四年）
・同「潘岳の伝記と文学（下）」『魏晉詩壇の研究』（朋友書店、一九九五年）五四—一五六頁）

・齋藤希史「潘岳「悼亡詩」論」『中國文學報』第三十九冊（一九八八年）

・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、一九八八年）（潘岳「悼亡詩」は川合氏が担当）

³² 注24前掲「潘岳論」参照。

³³ 注25前掲『潘岳 陸機』「妻にささげる哀歌——「悼亡詩」——参照。

³⁴ 川合康三氏は、「帷屏」に李夫人の故事を、「翰墨」に名筆楊氏の背景を読まれる。前者は、第二首に李夫人のことが詠ぜられる伏線として機能するものとして理解される（注31前掲興膳宏・川合康三『文選』「悼亡詩三首」其一）。

³⁵ 潘岳の文学について興膳氏がされた指摘に次のようなものがある。

しかし、親友や親戚・家族の死を悼んで書かれた作品となると、話はおのずから別である。身近な人であればあるほど、その死は彼にとつて深刻な意味を持った。あとからあとからこみあげる悲嘆の情は、いくら精巧に練られたレトリックをもつてしても、ともすれば破綻に瀕するほかはなく、それを懸命に支えきろうとする意志との間に、一種の張りつめた緊張関係が生じて、読者にも人ごとならぬ悲しみを分与することができたのである。

〔潘岳 陸機』一一四頁〕

悲哀の迸りが時として破綻を生じさせるのだとしたら、この箇所は作品に生じた綻びとも言えるのではなからうか。しかし、綻びであることは必ずしも問題ではなく、その分かえって「分与」されるものも大きく深くなるのかも知れない。

³⁶ においから想起される記憶を自伝的記憶（自分自身が関わっている過去の出来事）に限定した場合には、自伝的記憶は視覚的手がかりや聴覚の手がかりよりも嗅覚の手がかり（におい）で喚起されることがもつとも多く、しかもその場合、記憶の内

容はより情動的であることが多いことが実験からも示されている。

〔綾部早穂他編著』においの心理学』（フレグランズジャーナル社、二〇〇八年）6 においの認知と記憶〕

³⁷ 西岡弘『中国古代の葬禮と文學（改訂版）』（汲古書院、二〇〇二年）は、『楚辭』招魂篇と『禮記』喪禮篇に「祝・招具・嘯呼の共通点が認められる」と指摘して民俗学的考察を行うが、その際「招具」たる死者の衣について熏ぜられた可能性について触れている（四六九—四七二頁）。

³⁸ 復、有林麓則虞人設階、無林麓則狄人設階。小臣復、復者朝服。君以卷、夫人以屈狄、大夫以玄纁、世婦以禮衣、士以爵弁、士妻以稅衣、皆升自東榮、中屋履危、北面三號、卷衣投于前、司服受之、降自西北榮。其爲賓、則公館復、私館不復。其在野、則升其乘車之左轂而復。復衣不以衣戶、不以斂。婦人復、不以紳。凡復、男子稱名、婦人稱字。唯哭先復、復而後行死事。

〔禮記 喪大記〕

³⁹ 匂い、魂と捉えることについて、例えば、ライアル・ワトソン『匂いの記憶』（旦敬介訳、光文社、二〇〇〇年）は、アンダーソン諸島に住むオンギー族の人びとが匂いを「根源的な宇宙の原理」として捉えていて、「自分自身」のことを指し示すときには、人差し指で自分の鼻のてっぺんを指す」ことも含め、生死と密接に関わるものとしてしていることなどに触れながら、「命と呼気と匂いを関連しあつたものとしてとらえている文化は少なくない」と指摘する（一九頁）。

4。 「鼻」と「自」について、『説文解字』は以下のように字義を解いている。

鼻、所以引气自昇也。 从自昇。〔説文解字注 四篇上〕

自、鼻也。 象鼻形。〔説文解字注 四篇上〕

41 孝武李夫人、本以倡進。初、夫人兄延年性知音、善歌舞、武帝愛之。每爲新聲變曲、聞者莫不感動。延年侍上起舞、歌曰、「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國。寧不知傾城與傾國、佳人難再得」。上嘆息曰、「善、世豈有此人乎」。平陽主因言延年有女弟、上乃召見之、實妙麗善舞。由是得幸、生一男、是爲昌邑哀王。李夫人少而蚤卒、上憐閔焉、圖畫其形於甘泉宮、：

初、李夫人病篤、上自臨候之、夫人蒙被謝曰、「妾久寢病、形貌毀壞、不可以見帝。願以王及兄弟爲託」。上曰、「夫人病甚、殆將不起、一見我屬託王及兄弟、豈不快哉」。夫人曰、「婦人貌不修飾、不見君父。妾不敢以燕媚見帝」。上曰、「夫人弟一見我、將加賜千金、而予兄弟尊官」。夫人曰、「尊官在帝、不在一見」。上復言欲必見之、夫人遂轉鄉歔歔而不復言。於是上不說而起。夫人姊妹讓之曰、「貴人獨不可一見上屬託兄弟邪。何爲恨上如此」。夫人曰、「所以不欲見帝者、乃欲以深託兄弟也。我以容貌之好、得從微賤愛幸於上。夫以色事人者、色衰而愛耗、愛耗則恩絕。上所以攀攀顧念我者、乃以平生容貌也。今見我毀壞、顏色非故、必畏惡吐棄我、意尚肯復追思閔錄其兄弟哉」。及夫人卒、上以后禮葬焉。其後、上以夫人兄李廣利爲貳師將軍、封海西侯、延年爲協律都尉。

上思念李夫人不已、方士齊人少翁言能致其神。乃夜張燈燭、設帷帳、陳酒肉、而令上居他帳、遙望好女如李夫人之貌、還幄坐而步。又不得就視、上愈益相思悲感、爲作詩曰、「是邪、非邪。立而望之、偏何姍姍其來遲」。令樂府諸音家絃歌之。上又自爲作賦、以傷悼夫人、其辭曰、：

〔漢書卷九十七上 外戚傳上 孝武李夫人〕

42 右の注に外戚傳の当該箇所を掲げて示したように、李夫人は、天賦の樂才によつて武帝に寵愛を受けていた兄李延年在御前で歌つた、「北方に佳人有り」の句で始まる歌をきっかけとして寵愛を受けることとなつた。やがて、夫人は一男子をもうけ李家はわが世の春を謳うが、夫人は早世してしまふ。夫人の没後、武帝は甘泉宮に夫人の画を描かせた――。

李夫人の伝は、この最初の一段に続けて病床に在る夫人を武帝が見舞つたときのことを小説的に活写するが、一目顔を見たいと切望する武帝に対して夫人は拒絶を繰り返し、そのまま他界する。甘泉宮に夫人の画を描かせたことや、その後夫人を思つて已まれぬ武帝に方士が「其の神を致す」と言つて招魂をするものの、ついににはつきりとは見られず、武帝はその思いを歌と賦とに表すほかなかつたことなど、『漢書』外戚傳の李夫人の條は、武帝が視覚を阻碍され続ける物語と読むことができる。

武帝が作つたという賦については、後藤秋正「悼亡賦論」『中国中世の哀傷文学』（研文出版、一九九八年）を参照のこと。また、この賦の中に見られる視覚と嗅覚をめぐる感覚表現については、拙稿「輝ける香り、芳しき光り」『狩野直禎先生傘寿記念三國志論

集』(三國志学会、二〇〇八年)も参照されたい。

⁴³ 江戸中期の絵師鳥山石燕の手に成る絵の一幅に「返魂香」というものがある。



鳥山石燕『今昔百鬼拾遺』「返魂香」

『鳥山石燕画図百鬼夜行全画集』(角川書店、二〇〇五年)所収) こうしたものは、後世の想像の所産であるとすべきであろうが、白居易の新樂府「李夫人」に「九華帳深夜悄悄、反魂香降夫人魂。夫人之魂在何許、香煙引到焚香處」とあるのをはじめ、その由来はそれほど新しいものでもない。また、この「返魂香」の元になったのが『漢書』であるだけでなく、李時珍の『本草綱目』が西晋の張華「博物志」を引いて、西域将来の「返生神藥」なる香として「返魂香」を理解しているのはなかなか興味深い。必ずしも可能性が高いとは思われないが、もし、事実であるならば、潘岳

の時代にも既に「返魂香」という物語が存在したことになるのである。

時珍曰、張華「博物志」云、武帝時、西域月氏國、度弱水貢此香三枚、大如燕卵、黑如桑椹。值長安大疫、西使請燒一枚辟之、宮中病者聞之即起、香聞百裡、數日不歇。疫死未三日者、熏之皆活、乃返生神藥也。此說雖涉詭怪、然理外之事、容或有之、未可便指爲謬也。(『本草綱目 木之一「返魂香」』)

⁴⁴ 『三國志』后妃傳・卞皇后の條に卞氏が正室となった際のこととが記され、そこに附せられた裴松之の注に「魏略」が引用されている。丁夫人には子がなかったが、劉夫人が早く逝去した後は正室として「子脩を養」った。この「子脩」が曹操の長子曹昂である。その後、曹操が一旦降りながら改めて反旗を翻した張繡との戦いに敗れた際に、曹操に馬を譲った曹昂が落命したことが原因で夫婦関係は隙を生ずることとなる。凍てついた夫人の心を開かせることができずに離縁することとなった曹操は、後年、病に臥すなかで、もし靈魂というものがあつて「子脩」の靈に「母(丁氏)」の所在を訊ねられたらどう答えたらいだろうかと言ったという。

後太祖病困、自慮不起、歎曰、「我前後行意、於心未曾有所負也。假令死而有靈、子脩若問我母所在、我將何辭以答」。

(『三國志』卷五 后妃傳 武宣卞皇后注引「魏略」)
⁴⁵ 『晉書』何劭傳には、武帝司馬炎(二三六—二九〇)と同年であつたとある。そうであるとすれば、何劭は潘岳の一回りほど年長である。

⁴⁶ 何劭爲祭傳曰、祭字奉倩。祭諸兄並以儒術論議、而祭獨好言道、常以爲子貢稱夫子之言性與天道、不可得聞、然則六籍雖存、固聖人之糠粃。祭兄俱難曰、「……」。祭答曰、「……」。及當時能言者不能屈也。……祭常以婦人者、才智不足論、自宜以色爲主。驃騎將軍曹洪女有美色、祭於是媾焉。容服帷帳甚麗、專房歡宴。歷年後、婦病亡。未殯、傳嘏往嘑祭。祭不哭而神傷。嘏問曰、「婦人才色並茂爲難。子之娶也、遺才而好色。此自易遇。今何哀之甚」。祭曰、「佳人難再得。顧逝者不能有傾國之色、然未可謂之易遇」。痛悼不能已、歲餘亦亡、時年二十九。……

〔三國志卷十 荀彧傳注引「荀祭傳」〕

⁴⁷ 引用では中略した箇所を議論のことが記されている。

太和初、到京邑與傳嘏談。嘏善名理而祭尚玄遠、宗致雖同、倉卒時或有格而不相得意。裴徽通彼我之懷、爲二家騎驛、頃之、祭與嘏善。夏侯玄亦親。常謂嘏・玄曰、「子等在世塗間、功名必勝我、但識劣我耳」。嘏難曰、「能盛功名者、識也。天下孰有本不足而末有餘者邪」。祭曰、「功名者、志局之所獎也。然則志局自一物耳、固非識之所獨濟也。我以能使子等爲貴、然未必齊子等所爲也」。

これらの応酬に続いて、引用の「祭常以婦人者」の一段がある。

⁴⁸ 引用箇所が続いて、荀祭が「常人」とは付き合えず、交わつたのは「一時の俊傑」たちであったこと、葬儀に赴いた者はわずかに十数名であったことが記される。

祭簡貴、不能與常人交接、所交皆一時俊傑。至葬夕、赴者裁十餘人、皆同時知名士也、哭之、感動路人。

⁴⁹ 例えば、『老子』には、「愚人の心」のまま「沌沌」たる「我」が述べられ、『莊子』には、知らぬままに「渾渾沌沌」たることの重要性が説かれている。

絶學無憂。唯之與阿、相去幾何。善之與惡、相去若何。……我獨泊兮其未兆、如嬰兒之未孩、儻儻兮若無所歸。衆人皆有餘、而我獨若遺。我愚人之心也哉。沌沌兮。俗人昭昭、我獨昏昏。俗人察察、我獨悶悶。

〔老子道德經 二十章〕

解心釋神、莫然无魂。萬物云云、各復其根、各復其根而不知。渾渾沌沌、終身不離。若彼知之、乃是離之。无問其名、无闕其情、物固自生。

〔莊子 外篇 在宥〕

⁵⁰ 織、亂也。一曰治也。一曰不絶也。从言絲。

〔說文解字注 三篇上〕